

オセアニアのフィジーで「ヴィチ・カンバニ」(Viti Kambani)と称されてきた運動を中心に、フィジー社会での良き経済秩序について考える。

[1] Viti Kabani 運動の概要

この運動は英領植民地時代の 1910 年代に出現し、フィジー人の多くを熱狂させて見る間に全土を席卷した。植民地政府からの厳しい弾圧を受けて次第に衰退を余儀なくされたものの、ヴィチレヴ島西部を中心に執拗に生き残り、フィジーが独立を果たした今日においては、過去・現在・未来を語る重要な記憶として想起される。

運動の中心人物は、Apolosi Nawai[1875?-1946]という名の 30 代の男だった。「ヴィチ・カンバニ」とは英語の「フィジー・カンパニー」のフィジー語形であり、「フィジー人の会社」を意味している。つまり運動はフィジー人によるフィジー人のための会社設立を目標に謳い、西洋人支配の払拭とフィジー人の繁栄をアポロシの指揮下に実現しようとした。それは経済的にして政治的な運動であり、またアポロシの有する超自然的な力「マナ」(mana)への信仰に支えられた宗教的運動でもあった。再三の弾圧とアポロシの流刑や死亡を乗り越えて、この運動は今日に至るまで語り絶やさない。

[2] 運動の経過

会社とは白人が隠しているパワーの秘密であり、フィジー人はこの会社を「フィジー会社」として創設することによってパワーを奪取できる ----、アポロシの提起に人々は聖なる真理の開陳をみた。彼を「本当の首長」(turanga ndina)とみなし、彼の言葉に

従って現金を抛出し彼のマナの恩恵に浴そうとした。

運動は出資の証書発行、株主総会の開催、役員を選定、社旗の掲揚、規約書の作成、事務所や諸資産の所有など、西洋人の会社形態を模倣した。各地に中心的人物を育ていき、地域をこえて迅速な情報ネットワークを築いた。彼らは植民地政府の行政機構をそっくり真似た官職に就いた。

運動は画期的な「新時代」(Gauna Vou)の到来を確信させた。白人やインド人の商店は全部閉められ、ただ「会社」の商店だけが営業されるだろう。アポロシは「王」(tui)として白人を海の彼方に追放し、フィジーは「アポロシの国 - 政府(matanitu)」となって「独立し」(tu vaka koya)、生活は「向上する」(toro thake)。アポロシは聖なる神(kalou)として讃えられ、彼の言葉はマナであり「本当(である)」(ndina)とみなされた。

フィジーの各地で政府の命令は無視され、徴税や賦役は滞り、イギリス統治の終わりを宣言する踊りや歌が現れた。「matanitu が二つあるようだ」という異常事態に至った植民地政府は危機意識を強めて弾圧をつづけた。1910年代から30年代まで、活動抑圧のための諸法を幾つも制定していき、アポロシの逮捕と長期流刑を繰り返した。

この間「会社」は放漫な経営がたり、出資者・出荷者への配当や代金支払いを一向に実現できなかったが、遠方のアポロシが毎年のように下すあたらしい「命令」(ota)にしたがい、そのつど出資金ないし加入金を集めて彼のもとに届けようとした。アポロシは勢力を縮小したものの依然全国に崇拜者をもち、流刑先で死亡する。1940年代半ばまで少なくともフィジー西部の多くの地域で多額の資金を調達した。

「命令」はこの他にも、首長と平民、キリスト教神と土着神、フィジー西部と東部、フィジー人とインド系人、都市と農村にかかわる実践活動を短文の形態で残しており、今日では対立する解釈を許しつつ、それぞれの主張の拠りどころとしてもちいられる。

[3] あるべき経済秩序

「会社」は形式こそ西洋を模倣したが、内実はアポロシのマナによって貨幣と富を増殖すべく、彼の「命令」を伝達して彼へと金を届ける装置として働いた。この点は、「本当の turanga」によって統治される matanitu の理念を、前キリスト教時代の延長上に実現しようとしたところみとして描くことができる。

ただし「あるべき経済秩序」は漠然としている。アポロシのマナは「会社」を包摂する turanga や matanitu の言葉によって語られ、「会社」の具体の細部への関与を欠いている。運動はビジネスの成否を議論するのではなく、成功がいかにか必然であるかを熱っぽく語る場に終始した。また彼のマナや turanga ぶりは、賛同者の理解を越えてどのように驚嘆を呼び起こしたかという形で語られていて、同定の難しさ自体に根拠を置く傾向さえある。

[4] 差異と反復

(i) 反復

この運動で注目を引くのは反復である。事業が幾度となく失敗しても、なお再出発して共同出資をつづけるというパターンは、フィジー人ビジネスの典型として現在まで繰り返されている。

もちろんこの反復は、そのつど差異を付与されて始まる。差異を含んだ反復は運動の特徴であるばかりか、それ自身が運動を成り立たせる重要な要素となっている。

(例)

「キリスト教神（エホバやイエス）は祖先神と深い関係にある（veiwekani vata）」 「キリスト教神は『双子の神 Na Ciri』と深い関係にある」 「『双子の神』は Navosavakadua と深い関係ある」 「Navosavakadua はアポロシと

深い関係にある」

(ii) 差異

アポロシと運動をめぐる語りは、現在まで繰り返される過程で変容をみている。「愛/思いやり」(loloma)という徳目の強調、その loloma に溢れるがためにビジネスに不向きなフィジー人という自画像の形成、土着神の悪役化などがそれであり、アポロシを崇拝する者や批判する者たちそれぞれに、語りの変化を生んでいる。

だがそのいずれにおいても、語りは取り戻せない過去への嘆きや郷愁を掘り起こす。

[5] 反復と想起

「あるべき経済秩序」をめくっては、見解や立場の相違を越えて、フィジー人の受けるべき祝福や、その祝福をもたらす turanga が想起される。だがその turanga のあり方については同定できない上に、変容がジレンマを深めている。「あるべき秩序」を同定できないまま、漠然と祝福や「本当の turanga」が想起されビジネス活動が反復されていく。

この想起は、過去に向かってなされる。アポロシに熱狂した者、アポロシを賛美する者、アポロシを批判する者が、その差を越えて一致して抱くのは、「本当の状態」=「取り戻せない過去」というイメージであり、それでもなお「本当でない」現在を「本当の」状態に変えようとする絶えざる願望である。

たとえ「発展」(veivakatorocaketaki)や改革が唱えられても、それは「あるべき」ものへの回帰であって、過去の祝福を回復するために先へ進むことを意味する。フィジー人の多くはこの「本当の」状態、あるべき姿に向かって、現状の「本当でない」ビジネス、「本当でない」契約、「本当でない」憲法を、繰り返し覆す。そして「本当の」状態に回帰する予兆をみいだそうとして、言葉や現象の隠れた意味を解読することを

やめない。

文献

France, Peter

1969 The Charter of Land: Custom and Colonization in Fiji. Melbourne: Oxford University Press.

ホカート , A . M .

1986(1927) 『王権』橋本和也訳 ,京都：人文書院 (Kingship. Oxford University Pr.)。

Hocart, A.M.

1970(1936) Kings and Councillors: An Essay in the Comparative Anatomy of Human Society. Chicago: University of Chicago Press.

Kaplan, Martha

1995 Neither Cargo nor Cult: Ritual Politics and the Colonial Imagination in Fiji. Durham:Duke University Press.

春日直樹

1997 「『発端の闇』としての植民地」、山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化』、東京：新曜社、128-151。

Kasuga, Naoki

1994 Christ, the Devil, and Money: Witchcraft in Fijian History. Man and Culture in Oceania 10:39-57.

MacNaught, T.

1970 Apolosi R.Nawai:The Man from Ra. In Davidson,J.W.and D.Scarr(eds), Pacific Islands Portraits,pp.173-192. Canberra.

Routledge, David

1985 Matanitu:The Struggle for Power in Early Fiji. Suva: The Institute of Pacific Studies.

Sahlins, Marshall

1981 The Stranger-King; or, Dumezil among the Fijians. In The Journal of Pacific History 16:107-32.

Thomas, Nicholas

1986 Planets around the Sun. Sydney:University of Sydney.

Tippett, Alan

1954 The Christian: Fiji 1835-67. Auckland: Institute Print.

ワースレイ、 P .

1981 『千年王国と未開社会』吉田正紀訳、東京：紀伊國屋書店 (The Trumpet Shall

Sound. Granada Publishing.)。